



SOCIETY FOR INFORMATION DISPLAY

Newsletter

発行元 : SID日本支部
発行責任者 : 近藤 克己
発行日 : 2010年 10月10日

日本支部

第45号

支部 HP URL : <http://www.sidchapters.org/japan/>

SID PRESIDENT'S VIEW: GROWTH OF 'SID' IS IN YOUR HANDS M. Anandan, President, SID



The Society for Information Display (SID) promotes the display and display related science and technology. The building blocks of the SID are its chapters around the world. SID has no borders. The greatest asset of SID is its members. The society has grown over the years starting from 1962 and it is ranking as The Number One society in the world on display technology because of the dedicated service of numerous volunteers for the past 47 years. Japan Chapter of SID played a predominantly significant role for the growth of SID and it is continuing. As incoming President I appreciate and thank the chapter. The chapter provided its first SID leadership through Prof. Shigeo Mikoshiba, who made outstanding and exemplary service to SID as President.

Several Presidents came, served and retired. All of them led the society to its growth in different areas and I am thankful and grateful for their dedicated service. As incoming President, I am focusing on the growth of membership, including sustaining members, of the society. Currently the membership growth is not in proportion to the growth of the display industry. SID is a non-profit organization but there is a need to strengthen the financial position to provide service to our members. In the recent years the weak global economy has impacted us badly. We will be resilient and hence the financial growth is vital. During my term as President, to accomplish the growth of the society, I will focus on the following areas:

- (1) Increase SID activities in the regions of the world where the display manufacturing is migrating, for example, China and Brazil. The activity includes organizing more conferences, exhibits and forming new chapters.
- (2) Strengthening the partnership between SID and other sister organizations like ITE, KIDS and Club Visu.
- (3) Bringing new topics and focusing on areas where SID is strong. This will include LED video displays employed in giant screens, Military Displays and OLED Lighting.
- (4) Focusing on regional activities, with Chair Persons of major committees (Academic, Chapter formation and Convention) functioning independently for all the three regions.
- (5) Exhibit development through external and internal exhibit advisory committee.
- (6) Developing new sustaining membership structure to benefit SID and increasing membership benefits like, webinars, web-streaming and web certification courses.

Without the efforts of dedicated volunteers, no accomplishment can take place. I request all the volunteers around the world, starting from New Zealand to Canada and Brazil to Russia, to help SID grow.

2010 年度 SID 受賞者の声

Lewis and Beatrice Winner Award……………前田誠（有限会社前田コンサルティング）



思いもかけなかった SID の受賞に預かり恐縮しています。頂いた Lewis and Beatrice Winner Award は SID の成長、運営に貢献した人に与えられるものです。私が SID 日本支部長に就いたのは 1999 年でした。その頃の日本のディスプレイ業界は元気がよく世界の最先端を走っていました。CRT はディスプレイの王者であるもののフラットパネルの猛迫にあっていました。LCD では種々の動作モードについての発表が相次ぎ、市場が急速に伸び始めた段階でした。PDP では大型画面や効率向上案が盛んに発表されていま

した。FED,無機 EL、OLED などそのグループに食い込むための活動をしていました。毎年5月の SID 国際会議での発表件数は日本支部会員からの投稿が 1/3 程もありました。その内容も先端に行くもので SID 国際会議はまるで日本からの発表の場であるかのようでした。

当時のビジネス規模から考えると日本支部の会員はもっと大勢で当然だろうと思いましたが、そこで何とか SID 会員数を増やそうといろいろ工夫をしたものです。その結果二年間で日本支部の会員数は3割増加しました。積極的に日本支部が推薦した結果 SID の各種の受賞者は日本支部の会員がほぼ独占するまでになりました。

その後 Vice President アジア地区担当になったのを機にアジア地区に目を向け、各地区の SID 支部に働きかけアジア地区の SID の活性化を呼びかけました。現在は盛んにアジア地区での SID Conference が行われています。

これらの活性化は私が独自に行ったわけではなく、当時の日本支部の役員、それに多くの先輩方のアイデアと強力な支援の賜物です。大勢のかたがたにお世話になりありがたく感謝いたします。とりわけ小林駿介先生、内池平樹先生、御子柴茂生先生には丁寧にご指導していただきました。

現在の日本はディスプレイ技術では最先端を維持しているものの、ビジネスでも最先端とは言えない状況です。SID の日本支部会員数が増加しているとはいえません。SID 国際会議では韓国や台湾などから優秀な発表が目立つようになって来ました。

SID Conference には世界中のディスプレイの先端技術者研究者が集まります。立派な成果や、未成熟かも知れないけれども新しいアイデアが次々と発表されます。積極的に交流し意見交換をしてください。議論することで自分のあいまいであった考えに気づき、有効なアイデアも生まれてきます。日本支部会員にがんばってもらいたいです。

アイデアの次に必要なのはスピードです。私はディスプレイの仕事から離れ現在は「品質工学」（「田口メソッド」といわれる手法を用いて技術開発のコンサルタントをしています。「品質工学」は発明を生み出すことを主眼としたものではありません。技術開発の方法を合理化する手法です。開発や設計の場でこの手法を適用すると確実にそのスピードを改善できます。殆どの研究者、技術者は自分のアイデアを確かめ実現するために多くの試行錯誤を行ない、行き戻りしながら仕事を進めていますが、「品質工学」はこの試行錯誤や後戻りといった無駄な時間をなくします。「品質工学」で開発設計期間は半減できると言っても過言ではありません。皆様がこの手法をぜひマスターして最先端のディスプレイを生み出していただきたいと思います。

SID の発展と皆様のご健闘、ご活躍をお祈りします。

Fellow of the SID……………奥村治彦（株式会社東芝）

今回、オーバードライブや低消費電力技術を中心とした TFT-LCD の駆動技術への貢献を評価していただき、SID Fellow Award を受賞させていただきました。特に、液晶テレビの残像を大幅に低減するオーバードライブ技術が、夢の壁掛けテレビの新市場創製に貢献したことを評価されたものと思いますが、本研究開発当初はほとんど注目されず、研究開始から製品化まで10年以上かかりました。クラーク博士は”青年よ、大志を抱け”といわれました。いまでも、小職自身、これから必ず主流になると信じている奥行き感のある高臨場感ディスプレイ市場を立ち上げるために、自ら先頭にたって研究を推進しているところです。本受賞が、他の人がやっていないことに、高い志をもってあえてチャレンジする研究者に勇気を与えることを願って已みません。最後に、このような光栄な賞をいただけたことは、いままでご指導、ご支援くださったすべての方々のお陰と、本当に感謝しています。

Special Recognition Award……………村井隆一（パナソニック株式会社）

この度は思いもかけず、PDP の開発に対して大変名誉ある賞をいただき、誠に光栄に存じます。本研究・開発に関与された社内外の多くの方々の代表としての受賞と認識しております。ご関係の皆様方に深く感謝申し上げます。大学卒業以来27年間、縁あってディスプレイの研究・開発、特に大型・高精細化の研究開発に携わってきました。その集大成として、103 “PDP の研究開発に参加できたことに大きな喜びを感じております。今後も FPD 特に PDP の更なる進歩に対して、微力ながらお役に立ちたいと存じます。

Special Recognition Award……………北村道夫（シンテック株式会社）

この二十余年 LCD 設計開発支援用のシミュレーションソフトウェアを開発、製品化し、“LCD MASTER” の名で販売しております。大変多くの方々にご使用いただき、今日ではシミュレーションソフトウェアを用いることが LCD 設計の標準的なスタイルとなっていると感じております。こうしたことへの努力をご評価戴き今回の授賞になったものと存じております。大変ありがたくまた名誉なことと存じております。授賞委員会各位そして私をご推薦くださいました日本支部関係各位に篤く御礼申し上げます。また、多くのユーザー様の励ましとご支援あればこそそのものと感謝を新たにしております。LCD の性能向上には著しいものがあり、大画面、高画質の液晶 TV が一般家庭に普及しています。それに伴いシミュレータへの要求も高度化し続けております。これにお応えすべく機能増強に努めておりますが、この受賞を励ましと受け止め、LCD 産業のお役に立てるよう更に微力を尽くして参ります。今後ともご指導、ご支援どうか宜しくお願い申し上げます。

Special Recognition Award……………浜田弘喜（三洋電機株式会社）

この度は、名誉ある賞を賜り大変光栄に存じます。これも御支援を頂きました皆様のお陰と深く感謝申し上げます。今回、受賞の対象は、ディスプレイ用の 630nm 帯赤色半導体レーザと多結晶 Si TFT LCD ライトバルブに関する研究開発成果です。赤色半導体レーザは、20 年ほど前に開発した技術であり、当時としては赤色レーザの短波長化や量子効果・デバイス特性を改善する上で重要な結晶成長方法でした。20 年経過した現在もこの技術が製造方法の主流になっていると見聞しております。一方、本 LCD ライトバルブは、HD 対応のプロジェクター用のライトバルブとして、低温、並びに高温 Si プロセスを融合して開発した高性能 TFT を用いた表示デバイスです。これらのデバイスを用いた機器・システムは、現在我々の日常生活になくはならないものとなり、当社の事業、並びにこれらの技術開発を通して社会貢献できたことは大変喜ばしいことと思っております。

今後はこの受賞を励みに、皆様の御指導を賜りながら、次世代技術開発に邁進してゆく所存です。

Special Recognition Award……………篠田傳, 石本学, 栗本健司 (篠田プラズマ株式会社)



(左から
篠田傳氏、石本学氏、栗本健司氏)

プラズマチューブアレイ(PTA)は 42 型 PDP を実用化した 1990 年代半ばに着想し、真の高臨場感ディスプレイを目指し 1998 年より研究を開始しました。等身大表示できる高さ 2m×幅 3m の超大画面を目標とし、ガラス基板を使わないチューブ状発光素子+電極フィルムという発想に、PDP の発光原理を応用することで、全く新しいフィルム型ディスプレイデバイスを創り出す事ができました。昨年、目標としてきた 145 型 PTA を初めて商品化できたことで、新デバイスを世に送り出したという功績を認められて受賞に至りました。生みの苦しみの中で大きな喜びとなり、これまで開発・製品化を支援して頂いた方々に感謝いたします。今のプラズマテレビの兄弟であるこのデバイスをさらに大きく育て、真の臨場感を感じる超大画面が身近になり、人々の暮らしを豊かにできるよう、貢献していきたいと思っております。

学会発表時の支援制度について

本年度の今後の対象は、IDW '10です。主な内容としては以下の通り

1. 支援額：IDWにおける学生会員の参加費程度とし、評議委員会で当年度の予算を決定する
2. 支援対象学生：IDWでプレゼンティングオーサーとして、研究、開発報告（OralまたはPoster発表）を行うSID日本支部に所属する学生会員（申請と同時のSID会員手続き可能）
3. 申し込み方法など詳細は、<http://www.sidchapters.org/japan/>のIDWにおける学生支援制度参照

今後の主な研究会日程のお知らせ

日程	研究会名	開催地
10/12-15	IMID'10	Seoul, Korea
11/9	視覚と画質および一般	機械振興会館
11/18	高臨場感ディスプレイフォーラム	NHK 技研
11/14-17	IDRC'10	Sao Paulo, Brazil
11/26	IMID'10 報告会	機械振興会館
11/30	IDW'10 チュートリアル	福岡国際会議場
12/1-3	IDW'10	福岡国際会議場

編集後記

次号以降掲載希望の内容がありましたら、ご連絡下さい。

編集担当：豊村直史（ソニー）Naobumi.Toyomura@jp.sony.com